

京都特別集会 聖霊降臨節祈禱会

わが主イエス・キリスト

――ローマ書第8章31～39節――

1970年5月30日（京都）

小池辰雄

砕け・突破・包摂 主さま、ハレルヤ！ 栄光より栄光へ 受けるか受けないか 霊化 聖霊
の執成 「主さま」の一言 わが内なるものに対する畏敬 存在的なクリスチャン

【ロマ8・31～39】

31 然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。 32 己の御子を惜まずして我ら衆のために付し給いし者は、などか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。 33 誰か神の選り給える者を訴えん、神は之を義とし給う。 34 誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在して、我らの為に執成し給うなり。 35 我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。 36 録して『汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。 37 然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。 38 われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、 39 高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

●砕け・突破・包摂

「煩惱は身に添える影、去らしめんとすれども去らず、
菩提は水に浮かべる月、取らんとすれども取り得ず」

と。法然上人の言葉ですね。煩惱とか罪とかいうやつは、身に添える影で――こうやって私が立っていると必ずどこかに影がある――去らしめようとしても、どうしても去らしめるわけにいかない。

菩提は水に浮かべる月――菩提というのは悟りの境地です――それは水に浮かんだ月の姿で、取ろうとしても、それは取れないといったのが、法然の悩み、苦しみ、求めであつた。それがついに

「南無阿弥陀仏」



に焦点せしめられたわけです。

我々の実存構造は、砕け、突破、包摂です。

「ああ、我悩めるひとなるかな、この死のからだ」

とパウロが言ったのが、この法然の悩みと同じことです。もう、東西古今、人間の实存の問題は煮詰めれば、それだけのはなし。それで、私はあの『即身即主』（曠愛新書第6巻『キリスト道』1967年4月20日刊所載）の中にも書いたわけです。

どうにもならないという。しかし、その影がとれる世界がある。それはこの身の中に神を宿す。この身の中に光を宿すと、身がそのまま光体となりますから。光身光体となる。光の身となる。そうすると、今度は影を作ろうと思っても、影ができない。

太陽に影があるですか。あの赫々たる天体の太陽には影がない。地球には影がある。月にも影がある。地球も月も光体でない。これは煩惱の身だから、地球や月は。だから、地球だの月だの、光のない天体の中に住んでいるから、これは罪ができるのは当たり前の話だと言われるなら、それだけの話だ。それでは、せっかく地球の中に熱があるのだから、それがもつと燃え上がれば、そうすれば人類はみな焼けてしまつて、ちよいどいいかもしれません。それは冗談ですけれども。

そういうように、私たちの中に、

「汝らは世の光なり」

ということになったら、影はあれども影なき人になる。現実には私たちは、影なき人にはなれない。罪からは完全には解放されない。罪から恩寵の解放はされても、現実には解放されていない。そこに、K君も言われた、「歩まなくてはだめだ」ということが始まる。

また、「菩提は水に浮かべる月」という。今度は、自分自身が水にならなくてはいいかん。水になったら月が浮かぶ。月が宿る。水になって月を宿すことになったら――水は聖霊である。ヨハネ伝4章――そういう、水となりまた火となる。だから聖霊が、あるときは「火」といわれ、あるときは「水」といわれるのも、ああ理^{ことわり}あるかなということ。ちよいど、法然の言葉は、法然の悩みはそれで解けてしまふ。聖霊が来ると、法然の悩みは解けてしまふ。私たちは法然以上の世界に入つてしまふ。

●主さま、ハレルヤ！

「わが主イエス・キリスト」

と叫べば、「南無阿弥陀仏」以上の世界に入つてしまふ。「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」よりも我々の祈りは、

「わが主イエス・キリストよ」

と、これがもう祈りの極致です。

「天にまします我らの父よ」



という祈りを教会でやっているね。しかし、このキリスト召団の祈りは何かというと、

「わが主イエス・キリスト。アーメン、ハレルヤ！」

です。これは今日初めて言います。

「主さま、ハレルヤ！」

と。祈れないなんてことはありはしない。これはもう最高の祈りなんです。いつも言っているように、最深最高の世界は今、即刻ここにおいて得られる世界、成される世界です。

「入ったから、さあ鍛えてやるぞ」

というんです、福音の世界は。「入るように鍛えるぞ」ではない。入るのは全く無条件に入れる。

「入ったから、さあ今度は、そこに灯るものが灯ったから、伝道力が来たから、それによってお前たちを鍛えあげていく」

と。パウロが鍛えられているのはみんなそれなんです。いわゆる努力精進とはちがう。パウロは、

「それをあくまでも追求する」

と言った。それは常に恵みを得ている。恵みが引つ張っている。伝道力が来ているから、それによって推進せよと。

●栄光より栄光へ

だから、この「砕け」は、砕けたる魂なん言ったって、我々は本当に砕け切らない。キリストが砕けをくださっているのだから。キリストの十字架の砕けをいただくと、我々の魂が砕けていくのです。この頑ななまま、傲慢なまま、そのままの姿でキリストにぶつかれば、十字架上の片一方の盗賊はこの砕けの世界を――キリストの十字架を見たから、これは砕けなんだから――この砕けを見て、そこに彼の言葉が発したわけです。それでこの砕けを賜った。砕けを賜って、それから本当に砕くことのできないような砕けの世界に、本当にキリストによって私たちは、この十字架によって粉碎された。その事態をまた別な言葉で私は「無」と言っているだけのなしだ。もう、自我が木っ端微塵になっているのだから、無私だから。

そうすると今度は、聖霊がやって来るから。復活のキリストの復活の生命がやって来る。キリストは墓を蹴破って出てきた。「突破」してきた。死を突破し、罪と死と黄泉を突破し、サタンを撃退してやって来たのが、この復活のキリストの姿である。この復活のキリストはこの突破です。砕けから――これもキリストが砕けた――キリストが突破した、キリストが「包摂」した。全部これはキリストの事態ですよ。これを私たちは絶対恩寵としていただくのだから。そうして、限りなく鍛え上げられて、砕けより砕けへ、突破より突破へ、包摂より包摂へと進んで行く。



「これ栄光より栄光へとついにキリストの姿に化するなり」ということ。そういうのが我々の全実存の構造です。そして、この世界に行くと、もういよいよ終末的な世界です。

●受けるか受けないか

ローマ書8章31節から。今日は非常にいいです、時間が短いから。短いのも大変結構なことです。非常に短い祈禱会をやる。もう、時間の長短というものにこだわることはない。大丈夫です。

31 然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、神もし我らの味方ならば、「神もし我らの味方ならば」ではない。「神我らの味方であるがゆえに」ということ。

誰か我らに敵せんや。

パウロにとつては、「神」とくれば、ちゃんとキリストがそこにござる。

もう天下無敵です。「無敵艦隊」というのがあるね、我々は正に無敵艦隊だ。私みたいに生れつきの弱虫が、こういうことがハッキリ言えるんだから。私みたいなやつが救われたんだからね。内村先生が戦場ヶ原で友人と語ったときに、

「私みたいな罪びとの首^{かしら}みたいなのが救われたんだから、万人は救われる」と、

内村先生が万人救済を言ったその根拠は、

「私が救われるからだ」

ということ。また、

「もし、万人が救われなければ、私は救われない」

と彼が言った。それは本当に内村先生の実感でしょう。パウロがそうだった。

ところが、あにはからんや、「罪びとの首^{かしら}」となつたのはイエス・キリスト自身である。イエス・キリスト自身が罪びとの首となつて、私たちの罪を一切負って十字架にかかった。ですから、救われない人は絶対に一人もありません。ただ受けただけのはなし。受けないから救われないだけのはなしです。受ければ絶対に救われてしまう。これは片一方の盗賊がそのことを実証している。

●霊化

32 己の御子を惜まずして我ら衆^{すべて}のために付し給^{わた}いし者は、

この大事な御子を惜まずして我ら衆のために贖罪の死を遂げさせ給いしところの者は、
などか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。

万物、森羅万象はキリストに比べれば無限大に大きなものと思うかもしれないけれども、どっこい、「これを超える」とパウロは書いている。キリストをいただいたら、これに添えるものとして万物をくれると。我々は本当に、宇宙は我々らものである。宇宙的な人間と



いうのはそうです。キリストを持てば、本当に宇宙的な人間です。キリストはコスミックなひとでありますから。

33 誰か神の選り給える者を訴えん、

神さまに選ばれた。キリストによつて私たちは神に選ばれた者である。選ばれた者は人を救う義務がある。責任がある。栄光がある。私たちはもし、選ばれて人を救わなかったらなら、これは選りから落ちますよ。

「われ福音を宣べ伝えざれば災いなるかな。これは止むにやまれない、止むを得ざることなり」

とパウロが言つたようなくあいです。

神は之を義とし給う。

私たちにはこのキリストの義を与えられた。キリストの義が与えられて、神との本当の交わりの世界、本当に神の意志を行ずる事態です。

「汝の意志を、汝の御意をして成らせ給え」

という。汝の聖意志をして、汝の霊なる意志をして、私たちに与えられたものは、この知情意はみな靈化してしまうという。霊感情、靈意志、靈知なんです。そういうものに変わられていきますから、それは自在に皆さんを通して、その人の特色が表れていく。そして、それが大きなハーモニーとして作用していくというわけです。

34 誰か之を罪に定めん、

なんと言つたつてもうこれは罪に定められていない。これはもう贖われていますよ。そして、その中へグングン進んで行くんだから。それで私みたいな「マイナス99」は、この「1」がそいつをやつつけていく。

●聖霊の執成し

死にて甦えり給ひしキリスト・イエスは神の右に在^{いま}して、我らの為^{とりな}に執成し給うなり。

我らの為に執成し給う大祭司である。この執成しの大祭司キリストが在りたもう。また、私たちに助け主として、聖霊がまた執成しの霊として、

「聖霊言ひ難き呻きをもて執り成し給う」

というのがローマ書8章39節にある。これは私の兄貴が英語の聖書の中に英語で書いて、「1921年イースター」と書いてある。私はそれを英語の聖書から見つけたから、額に貼つてあるんだけど。兄貴はたった独りです。そして、

「誰か自分の志を受け継いで救われる者はいないか」

というのが彼の祈りで、それをまだ見ないで彼は死んでしまった。向うの世界へ行つてしまった。それで、この一粒の麦が地に落ちて死んで、私は救われたんです。「我らのために



執成し給う」このキリストの執成し、この聖霊の執成しが本当に働いたわけです。

³⁵我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。

これは殉教の死のことです。そういうものがどんなに来てもと。これはパウロが実際、自分がそういったものにさらされていましたから、パウロは実感をもって書いているわけです。

³⁶録して『汝のために我らは、

この初代のキリスト者たちは、

終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。³⁷然

れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、

我らを愛したもうところのキリストによりて、

勝ち得て余あり。

ブラウニングの詩の中にこういう句がある。これはブラウニングらしい句だ。

「土くれの中の、愛を持つている虫けらは、世界をいくつも持つているような、愛のない神よりもつと神聖なものではないか」

という。即ち、

「どんな虫けらでもそこに愛があるはずだ。それは観念的な神を信ずるよりも、一

つの虫けらにおいてその愛を見る方が本当だぞ」

というような気持です。

●「主やま」の一三三

私たちには愛の権化であり給うところの、一切は私たちを救いあげるところの――私たちを救いあげることが愛ですから――完全に私たちを救済し、魂を本当に神の御許に救いあげ、また霊体を与え給うところの、我らを愛し給うこのキリストにより、

³⁸われ確く信ず、死も生命も、

この肉体的な死も、またこの生涯も、

御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、

権力者のことです、

³⁹高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスに

ある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

なんと盛んな言葉でしょうか、パウロは。これは絶対に「思想」ではない。これは本当に実感からして、パウロはもの凄い勝利を絶叫しているわけです。もう何というものがこのパウロの中に、キリストが溢れていらつしやるかなと。キリストが爆発的な力をもってパウロの中に――これは本当に白熱の霊です――この愛は一切を救い上げて、変質変貌し



て、これを包摂してしまう。全部をその世界に変えてしまおうとしている。このもの凄い本願の中に私たちは入っている。そして、この人生を突破していく。

でありますので、このパウロのこういった盛んなものが、

「わが主イエス・キリスト!」

という一言の中に凝縮している。「わが主イエス・キリスト」という内容は無限無量の内容です。ですから、毎日の生活において、もうどの瞬間でも、

「主さま!」

と祈る。「わが主イエス・キリスト」はもつと簡単に言うと、「主さま」一言です。キリストは、

「父よ!」

でしょ。「父よ」の一言がキリストの祈りである。「アッバー」という。「父よ」というのが、キリストの全祈りは「父よ!」の一言である。大胆な言葉ですよ。一言にして本当に自分の存在の一切。だから、私たちには、この「父よ」に対して、私たちはキリストに「主よ」と言う。

「わが主イエス・キリストよ!」

は煮詰まれば、

「主さま!」

の一言になる。「主さま」の一言でもう直ちにどんな現実もそこで突破してまた包摂していくところの、そのことを毎日、体験することだけ。残されているのはこの体験です。体験にして体現であります。自分のうちに内的に経験していく方は体験だが、それを証して進んで行くのが体現ということ。体現の方が証の姿です。体験の方は内側の世界です。

●わが内なるものに対する畏敬

ゲーテの『ウィルヘルム・マイスター』の「ヴァンデルヤーレ」(遍歴時代)の終りの方に出てくる言葉に、

「宗教には三つの形がある。我らの上なるものに対する畏敬。それから、自分と同等なるものに対する畏敬——これは道徳的哲学的な、人格に対するところの畏敬

の念——それから、下に対する、小さな者に対するところの畏敬」

という。幼児には天使が守っている。幼児を決していたずらにはいかん。

「汝、卑しき者、小さき者を神のものとして取り扱え」

という、そういうものに対する、そこに宿っているところの神的なものに対する畏敬の念。これがキリスト教である。「上なるもの」の方は一般の宗教、民族宗教です。「同等なる者」の方は哲学的なもの。「下なるもの」はキリスト教。そして彼は、

「最後にもう一つある。それはわが内なるものに対する畏敬である」



と言った。「エアフルヒト・フォア・ズイツヒゼルプスト」(我自身に対する畏敬)という言葉で書いてある。この「我自身」というのは小我のことを言っているのではない。これは「エーベンビルト・ゴッテス」(神の似姿)としての、「セレム・エロヒーム」「神の似姿」としての我です。そしてもうひとつ、その

「神の似姿としての我」

というものは単なる自己ではなくて、私たちの福音から言えば、これはここに来ているところの聖霊です。このわが内なるキリストの霊、御霊のキリストに対する畏敬の念。至聖所がここに、私たちの中に開かれてある。このエルサレムの聖所と至聖所の間の幕が切つて落とされた。では、至聖所はどこに移ったかという、私たちの中に移ってきた。これが即ち、

「わが内なるものに対する畏敬」

です。内なる神です。

「われキリストの中に、キリストわが中に」

という事態がこの最後の段階である。ゲーテの言葉をもっと補って言うならば、そういうことであります。

そういうようにして、パウロもペテロもヨハネも、

「我を見よ」

と言ったときに、

「わが内なるキリストを見よ」

ということであります。

「このガラクタの中にあるところの、このキリストが見えないか」

と。ペテロが跛者を立たせたときに、みんなが驚いてペテロを見つめた。「我を見よ」とペテロが言ったから、一生懸命でペテロを見たんだ。「あれは神さまみたいだ」と。そうしたら、

「なぜ、私を見るか」

と今度は逆に言った。

「私の信仰でも敬虔でもないぞ。ナザレのイエス・キリストである」

と。そこがもう完全に御霊みたまのペテロです。もうおよそ福音書のペテロとは格段の相違です。完全に次元的な相違がきている。

● 存在的なクリスチャン

そういうような内なる世界です。私たちには本当に、我らの主イエス・キリストにあるところの神の愛は私たちの中に来てくださる。これによつてもう、毎日の現実において正に、「ザイン・クリスト」「ビー・クリスチャン」(キリスト者、キリストに在る者)という、そういう存在が本当に「存在的なクリスチャン」に、私たちは恩寵を土台にして鍛え上げられていく。



一切の経験が、どんな経験も必ずそれをプラスにして進んで行くような、そういう人になっていけば、今日会って次に一週間あとの日曜日に会ったときに、なんかみんな変わってきまして。だんだん変わっていく。そういうように、

「シラーという人は一週間毎に進展している人である」

ということをゲーテが『エッケルマンとの対話』の中で言ってます。シラーという人は、信仰的ではないけれども、彼は本当に努力精進の魂であつた。また、生れつきそういった非常に崇高な魂であつた。

「彼はキリストに似ている」

とまでゲーテが言ってますけれども。

とにかく、我々は内側は常に、

「躓いても転んでも滑つても、前進してやまず」

ということではなくては。そのようにして進んで行きます。

だから、それを何かくだらないことを言つて、モタモタしていたから、こないだ大喝してやったんだ。

「そんなことをしていたらもう解散してやるぞ」

と。皆さんは、どうぞひとつ、そのようにして行きましょう。私は本当に愛すればこそ、何でも言うんです。本当にもう無条件の世界で、立ち帰り立ち帰り来る人が前進また前進する。

「キリストの中に立ち帰り行くことが前進であります」

から。それでは、これからあと10分祈ります。

